

## 第2回日本機能水学会学術大会報告

岐阜大学農学部 早川 享志

### 1. はじめに

昨年度の第1回日本機能水学会学術大会に引き続き、第2回学術大会が平成15年11月27日(木)・28日(金)の両日にわたってホテル水明館コンベンションホール(下呂温泉)において「健康の維持と増進に役立つ機能水の本質を求めて」を大会テーマに開催された。開催地については、昨年の第1回学術大会の閉会式において第2回大会長の岐阜薬科大学葛谷昌之先生よりアナウンスのあったとおりである。岐阜地区での開催にあたって岐阜県の共催がほぼ決まっており、それを受けての開催となったことから、県の意向を受けての判断であった。岐阜県は、四方を山に囲まれ、木曾三川を擁し、温泉にも恵まれた山紫水明の地であり、水に対する関心はひとしお強いものがある。この地で第2回学術大会を開催できたことは、開催関係者にとっても願ってもない喜びがある。しかし、日本の真ん中に位置するという地理的条件もあり、全国からの参加者のアクセスを考えて開会は遅めに、閉会は早めにプログラムを組まざるをえず、かなり密な内容となった。以下にその概要について報告する。

### 2. 第1日目

第1日目は、大会実行委員長の岐阜薬科大学近藤伸一先生による開会宣言に始まり、大会長の葛谷昌之先生より水研究の重要性を込めた挨拶をいただいた。次いで日本機能水学会理事長の福井県立大学糸川嘉則先生は、昨年立ち上がった機能水学会にとっては、第2回目が非常に重要な意義を持つことを強調され、ハード面、ソフト面において今回は申し分ないとお言葉であった。来賓としては、ご多忙な公務の中、梶原 拓岐阜県知事がお見えになり、岐阜県としては、水研究を10年前から提唱していることを踏まえて今後の機能水研究には大いに期待しているとの挨拶があった。

開会式に続いて、大会長講演と特別教育講演が行われた。両講演は、一般公開講演として市民に公開する形で開催され、機能水について一般の方が理解を深める上で十分に有意義な講演会となった。大会長講演は「水の不思議を科学する—水は究極の保健薬になりうるか—」という題目で葛谷昌之先生により約30分に及んで水の本質について多方面から解説がなされた。また、特別教育講演にお

いては、北海道大学大学院鈴木鐵也先生より「機能水研究展開への課題：評価システムの構築の重要性」と題して講演いただいた。水という物質の不思議から、水への関心が高まった経緯、現状として認知されている機能水の紹介と、その客観的科学評価法の重要性について強調され、一つの評価モデルについて紹介された。これらの講演は、急速市民公開講座として位置づけが方針変更されたにもかかわらず、一般市民にもわかりやすく、イラストを加えてテンポよく話をしていただき、参加者からもわかりやすく良かったとの感想をいただき、実のある市民公開講演会となった。主催者側としては、まず、ほっとした滑り出しであった。

市民公開講座に続いての3時間は、一般口演が行われた。今年は一般口演数としては、昨年の34題を上回る38題の申込みがあった。その内訳は、電解アルカリ水関係11、農業関係4、医療関係7、食品関係5、そのほか基礎関係11であった。酸性あるいはアルカリ性電解水にかかわる演題が33と相変わらず多くを占めていたが、オゾン水を扱った演題は医療関係では1、食品関係では2と昨年よりも増加した。水の評価にかかわる演題が3あったことは今回の特別教育講演でも強調されたようにその評価法の重要性が認識されつつあることの反映であると感じた。今後の進展に期待したい。

第1日目の学術大会最後のプログラムとしては、シンポジウム(第1部)を行った。これまでのシンポジウムが従来の機能水シンポジウムを支えてきた各研究分野を中心としたセッション方式であったのに対して、今回は特定の分野に片寄ることなく広く機能水にかかわる内容を包括することを旨として「私たちの生活を取り巻く機能水の多様性」というテーマを謳った。北洞哲治先生には飲用アルカリ性電解水の有用性についてこれまでの評価の経緯と今後について、新井 高先生には、歯科領域特に歯内治療への酸性電解水の応用の現状について、塩田剛太郎先生にはオゾン水の有効性と応用面について、西本右子先生には、磁化水などの特性について各種分析手法を駆使した結果についてお話いただいた。すべてを網羅することは無理としても、機能水のいろいろな側面を包括して取り上げていただいた。今回のシンポジウムは、分野の垣根を超え、参加された多くの方に聞いていただけた。学会員の相互認識の向上と啓蒙に役立てば幸いである。学会としては異例の18

時 40 分まで講演が及び、別の会場から漏れ聞こえる賑やかな音を気にしつつ、第 1 日目の講演会を閉じた。

初日最後の締めくくりの懇親会では、大会長の葛谷先生より懇親会費をはるかに上回る価値があるとの挨拶どおり、十分な料理が用意されていた。これも協賛など多くの関係者による協力の成果であり、関係各位と尽力いただいた葛谷大会長をはじめ大会事務局関係者のお陰である。十分に広い会場であるにもかかわらず参加者が多く狭くさえ感じられた（大会事務局によると、参加者約 120 名とのこと）。会場の一角では、シンポジストの富山県立大学古米保先生と菟田隆治先生の手配により富山湾深層水ビールと富山湾深層水を用いたおつまみが用意され、人だかりとなっていた。個人的には、1 年ものの深層水ビールと芽芽玄米のもろみが気に入る、何度か足を運んだ。下呂町郷土芸能「ファンキーゲロッパ」による賑やかなアトラクションも用意され、時の経つのを忘れてしまう賑わいで、高山方面チャーターバス出発間近の 20 時 30 分ごろまで歓談が続いた。

### 3. 第 2 日目

第 2 日目の最初は、第 1 日に続いてシンポジウム（第 2 部）が行われた。富山湾深層水の利用については、懇親会で大活躍の古米先生より新規抗生物質の発見から商品開発まで富山湾深層水について広範に紹介いただいた。農業分野での機能水の利用については野菜茶業研究所の雁野勝宣先生に講演いただいた。農業分野については、対象が広く統一的な有効性評価が難しい現状に対して、用途限定による対応の可能性についてコメントがあった。最近の食品添加物の動向については、食品添加物協会の山田 隆先生に講演いただき、最近の食品添加物事情について紙面では得られないお話をしていただいた。

つづく一般口演は、活発な質疑によりお昼時間に突入し、午後の開始を 15 分遅らすこととなった。「電解水の各種ガイドラインの構築に向けて」のワークショップはコンピナーである国立感染症研究所の堀田国元先生の進行で行われた。今後、あらゆる問題に対応するためには、ガイドラインをしっかりと確立しておかねばならないことを強調された。時間の関係で、担当の先生方により休みなく連続しての講演となったが、要点については、冊子にもまとめられており、十分なものであった。

引き続き 13 題の一般口演が行われた。今回は、各一般口演は交代を含めて 10 分という厳しい運営となったが、

あらかじめスライドファイルを送付いただいたり、時間厳守での進行を守っていただいたお陰で懸念された遅延もなく、ほぼ順調に進み、一般口演は 16 時 50 分に終了した。この 2 日間の各座長にも感謝申し上げたい。

閉会式では、葛谷大会長がタイトなスケジュールの中にも活発な討論があり有益な会であったと述べられた。つづいて、時期の大会長として国際医療福祉大学付属熱海病院の北洞哲治先生が来年に向けての心づもりをお話された。下呂に続いて熱海かという一部参加者の関心も見受けられたが、結論は次回の学会誌に持ち越されることとなった。最後に事務局長の堀田国元先生が、一言お礼を述べられ、中部地方においても分科会や支部会を開催していただきたいとの期待の言葉をもって閉会となった。

### 4. 第 2 回日本機能水学会学術大会を終えて

日本機能水学会学が立ち上がって 1 年もたないうちに次の学術大会の開催にかかわることになった。途中の段階ではこうすれば良かったと思われる点多々あったが、E-mail を利用しての情報伝達、情報収集は大いに役立った。学会からの情報の発信を早い時期に行う手段の一つとして有効利用できるシステム作りが進むことが望まれる。また、ポスターや要旨のイラストデザイン、印刷の面では機能水学会事務局長の堀田先生にお世話いただいた。限られた日程のなかで無事にプログラム業務を終えることができたのは、事務局長の堀田先生に負うところが大きい。学会としても学術大会を地方で行う一つの形ができたのではないかと感じた。

下呂は全国からのアプローチが決して良いとはいえないにもかかわらず多くの方に参加していただき、本学術大会は盛会となった。これも多くの参加者（一般市民 118 人、会員 179 人うち新入会員 6 人、非会員 87 人、共催された岐阜県、機能水研究振興財団、後援していただいた日本薬学会、協力いただいた各社（広告掲載 21 社、機器展示 8 社、協賛 22 社 26 口）および運営に当たった大会事務局スタッフのお陰である。当日は、大会事務局（岐阜県保健環境研究所および岐阜薬科大学）に加えて岐阜県農業技術研究所、ホシザキ電気（株）、日本機能水学会事務局の各スタッフが一丸となって運営に当たっていただいた。バックヤードでの協力にも感謝申し上げる。来年も多くの方に声をかけていただき、より多くの方に参加していただけることを期待して、第 2 回日本機能水学会学術大会の報告としたい。